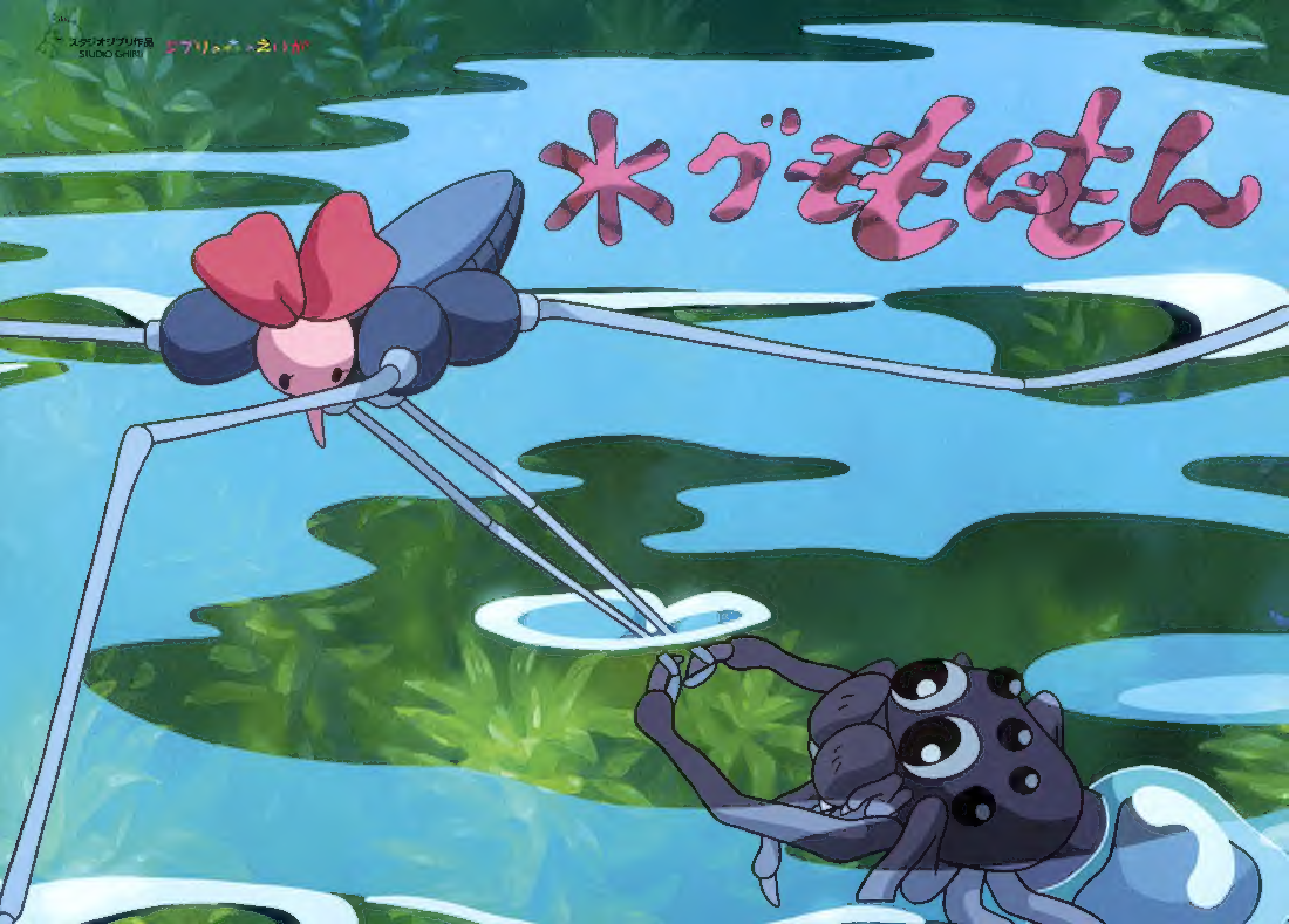

スタジオジブリ作品
STUDIO GHIBLI
水グモもんもん

ジブリの森のえいが

水グモもんもん

原作・脚本・監督：宮崎　駿
音楽：山瀬理桜
演出アニメーター：田中敦子
制作：スタジオジブリ
スタジオジブリ・マンマユート団　提携作品
上映時間：14分54秒

© 2006 二馬力・MG

ごあいさつ

小学校の教室で、先生がクモには眼が八個あって、ハエトリグモの頭を顕微鏡で覗くと、真っ黒な毛だらけの頭に赤い目玉が八個ならんでいて、とてもきれいなんだと話してくれました。同じ頃水の中にすむクモが出てくるマンガを見ました。水草の葉裏に空気の泡をくっつけて、その中に住んでいるなんて、おもしろいなあと思ったのですが、残念ながらぼくは昆虫学者になる素質はなかったようで、それきりでおわりました。

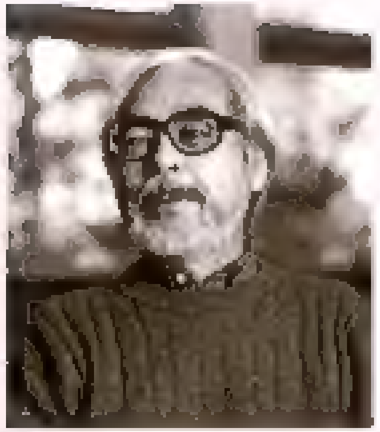
美術館の「トトロぴょんぴょん」の部屋に、パノラマボックスを作る時、水中の世界もぜひ一個ほしいと思いました。もともと水の中を覗くのが好きでした。澄んだ流れや池の中を見ていると、高いビルの上から下界を見下ろしているような気がしてきます。そこに小さないきものの姿を見かけると、なおドキドキします。ヒルがはっていたり、透明なエビが無重力状態の宇宙船のように動いたり、ザリガニなんてなんと良く出来ているのでしょうか。沢山の手の先がみんなツメになって動いているのを発見した時は、息を呑むってこれだなと思うくらい感動した記憶があります。

水の中の小さないきもの達には、世界はどう見えているのでしょう。空気の泡も、ぼくら人間が感じるよりももっと弾力があるはずだし、重さそのものがほとんどない宇宙みたいな所のはずです。

そんなことがあるので、泡の中に水グモがいるパノラマを作って、題も思いつくまま「水グモもんもん」とその場で決めました。スタッフがザリガニやカエルや、奥のほうに大きなメダカなんかを丁寧に良く描いてくれたので、今でも「水グモもんもん」は子供達の人気の的です。息をつめて、箱の中をじっと見つめている子供達を見ると、ぼくは思わずニンマリしてしまいます。

ところが、実際の水グモの生態とは違っていたんです。ぼくはいつものクセでうろ覚えで描いちゃうから、絵が出来てから、いろんな資料が現れたり、本が届けられたりして、後のまつりになるんです。

水グモはお尻の下の方に息をする気門があってお尻に空気の泡をつけて、アクアラングのように水中で息をしているのです。お尻に泡がくっつくと、簡単にはとれないんですね。その泡を水草の葉裏に糸でくくりつけて、また水面にのぼってお尻に泡をくっつけて来て、少しずつ大きくします。身体全体が入れる大きさになると、巣は出来上がり。その中



宮崎　駿

でエサを食べたり、お尻だけつっこんでおいて、頭は水の中に出してエサを狙ったりします。

パノラマボックスの絵は、子供達が気に入ってくれているので、なおすのはシャクです。そのうち、いつかもんもんの映画を作ろうと思うようになりました。といっても、すぐ作り始められるわけではありません。時々思い出して、ちょっと考えたり、また頭の中の引き出しにしまったり、つまり、忘れたりするのです。

そうしているとふしぎなことにいろいろなものが目に入るようになります。ボンヤリ見ていたテレビの映像にヒントになるものがあったり、散歩の途中に、水辺にはえている植物の、水と空気のさかい目を覗いたり、バッタが水面におちたのに、またはねて脱出するのを見て、どうして沈まないのか、アレコレ考えたりするようになります。

引き出しに、いろんな形やようすが、少しずつたまっていくのです。

私達のくらしのまわりから、虫が少なくなりました。同時に虫が大キライな子供達が増えています。いえ、大人だってそうです。親がきらうので子供達もキライになるのです。

どうか虫を好きにならなくても、触れなくてもいいですから、虫をキライにならないで下さい。

水グモの映画を作れてぼくはとても幸運です。スタッフの努力に感謝すると共に、息をつめてパノラマボックスを覗いてくれた子供達が、この映画を実現させてくれたのだと思います。

あらすじ

水グモもんもんにとって、光る水面は異世界との境界みたいなもので、もんもんは水面から粘りっこい空気をちぎりとって、水草が高層建築のように立ち並んでいる谷間へと運んでいく。水グモは水中を縦にだって歩くのだ。水草は巣を作る大切な隠れ場所。水の中は獲物を狙う捕食者の狩場で、トンボやゲンゴロウの幼虫達はティラノサウルスよりももっとこわいし、ザリガニは水草そのものをひきちぎってしまうし、大きな魚は水グモなんかひと飲みにしてしまう。

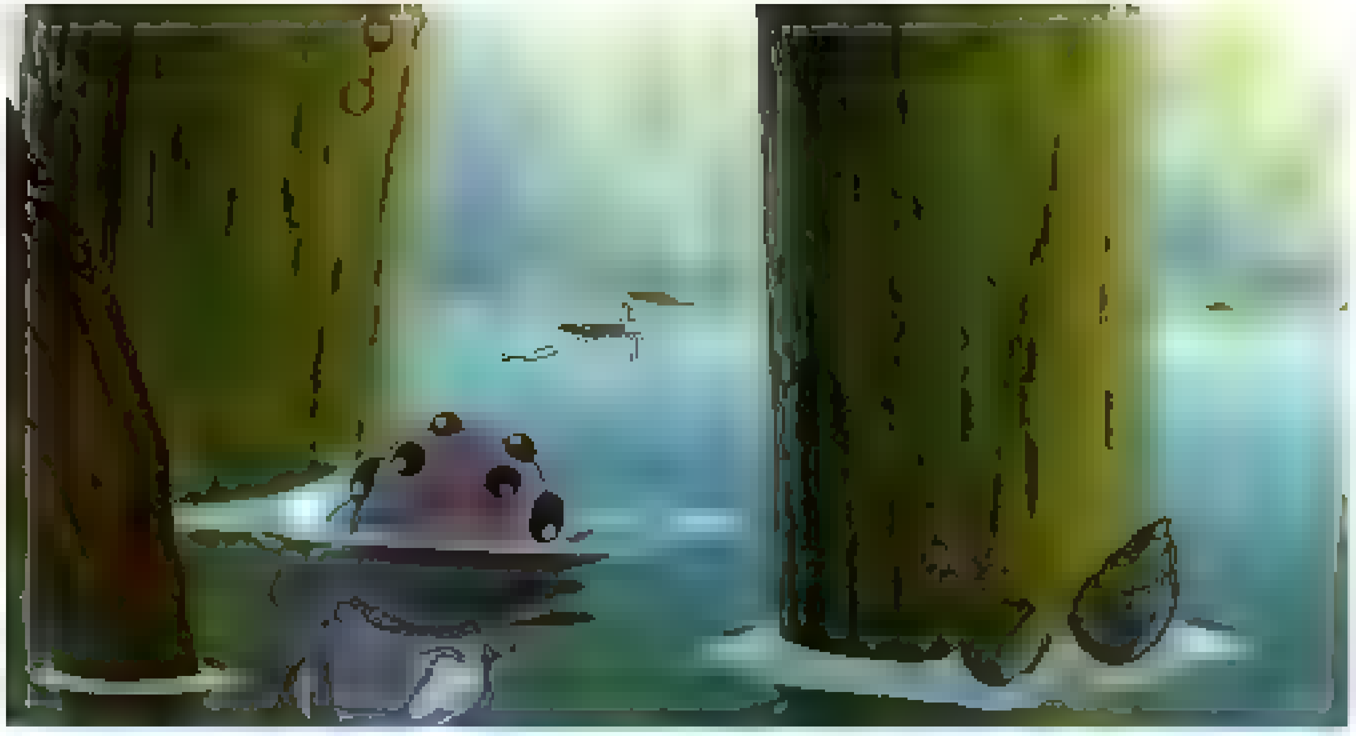
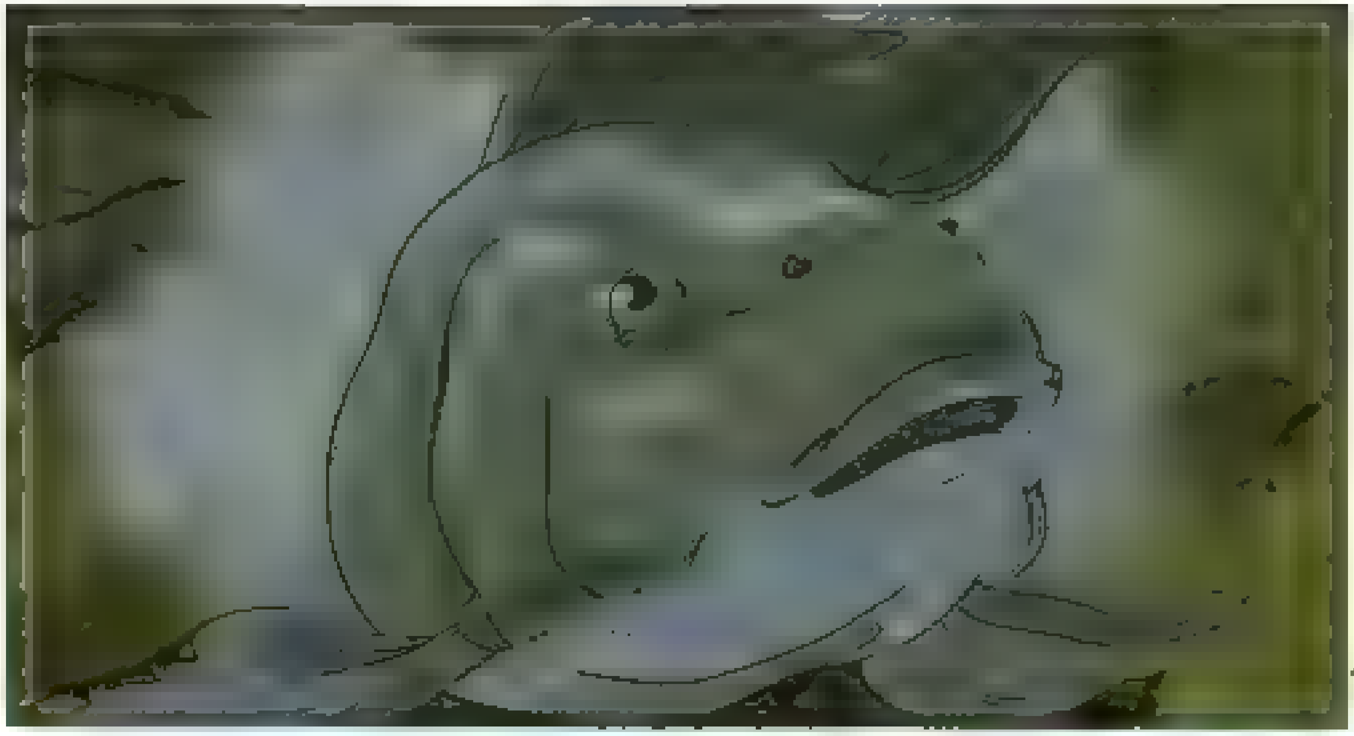
もんもんは、ひとりぼっちでオドオドとかくれながら、勤勉に生きている。そして、自分より小さくて弱いものなら、なんでもつかまえて喰ってしまう。

もんもんはある日、水面を自由に滑るアメンボのお嬢さんに会う。なんて愛らしく、スマートなんだろう。すっかり心を奪われるもんもん。でもアメンボ嬢は凶暴だ。うっかり近づけば鋭い吻(ふん)でひと刺し、体液を吸われてしまう。それでも忘れられないもんもん。もんもんの想いは通じるのだろうか……。

毎日　まいにち　もんもんは空気をはこぶ
水面と泡の家の間を　いったりきたり

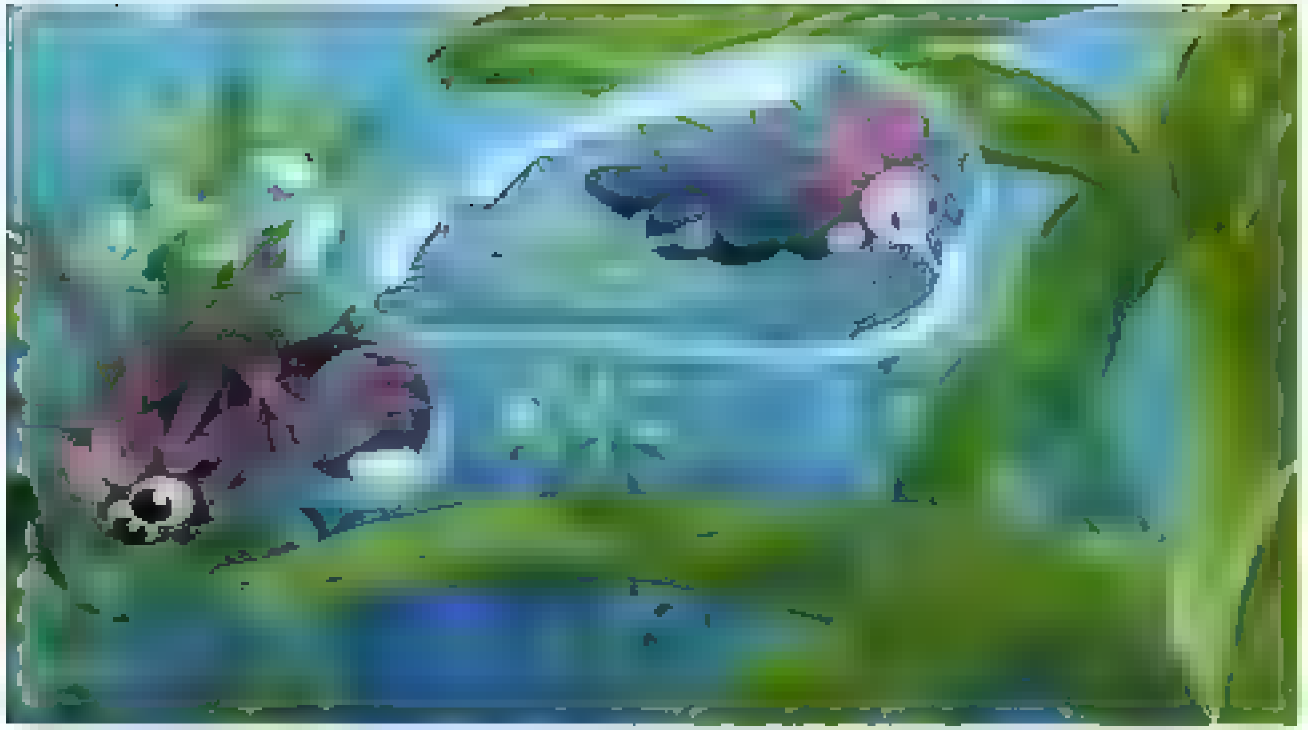
ある日　もんもんは　アメンボのお嬢さんとバッタリ会った
アメンボ嬢は　水面をスイスイ走る
水グモなんかより　ずっと自由でちょっとこわい

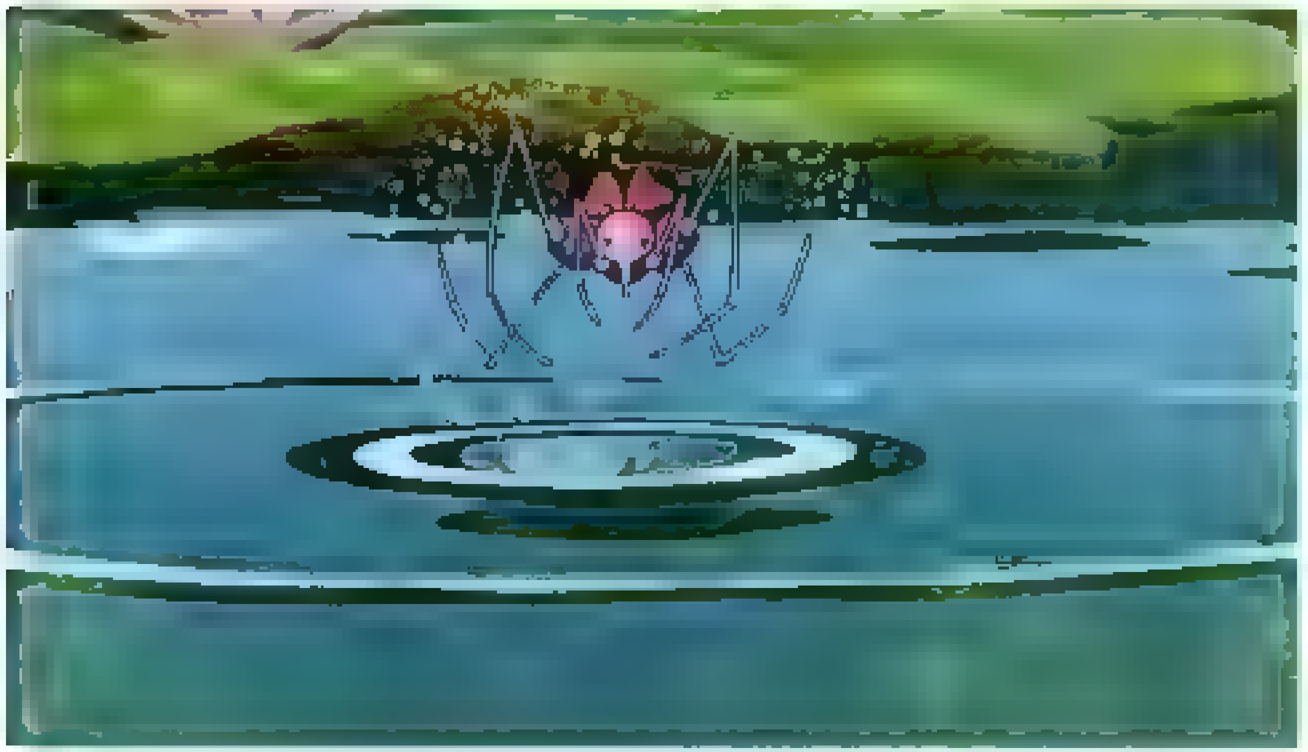
ひとりぼっちの沼の夜
もんもんは　アメンボ嬢が忘れられない
ぼくも　あんなふうに　自由にすべってみたい

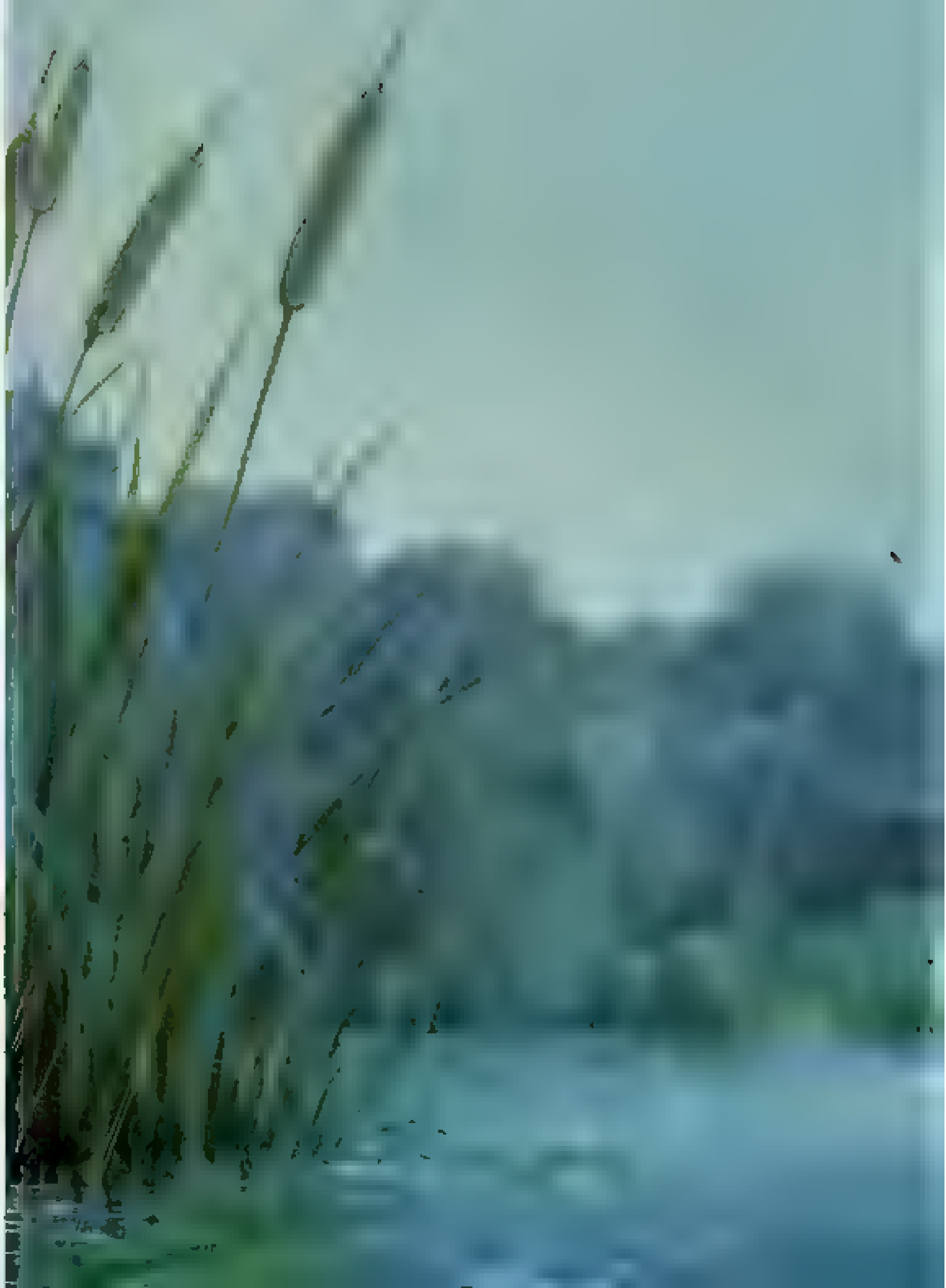
きょうも　沼はいいお天気
アメンボ嬢は狩に夢中で　カゲロウを追いかける
そこへ　大きな魚が　おそいかかった

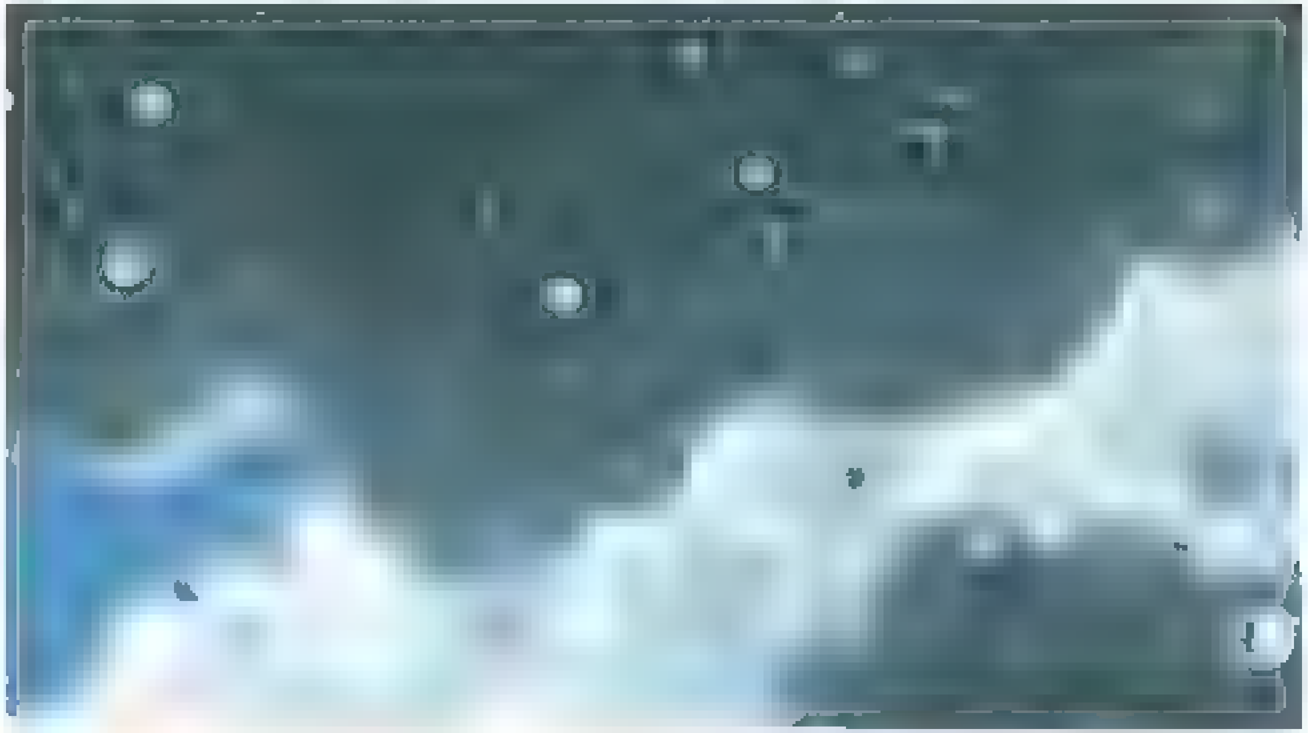
たいへんだ
アメンボ嬢は気を失って水の中
もんもんは　たすけに泳ぐ
しっかりして！

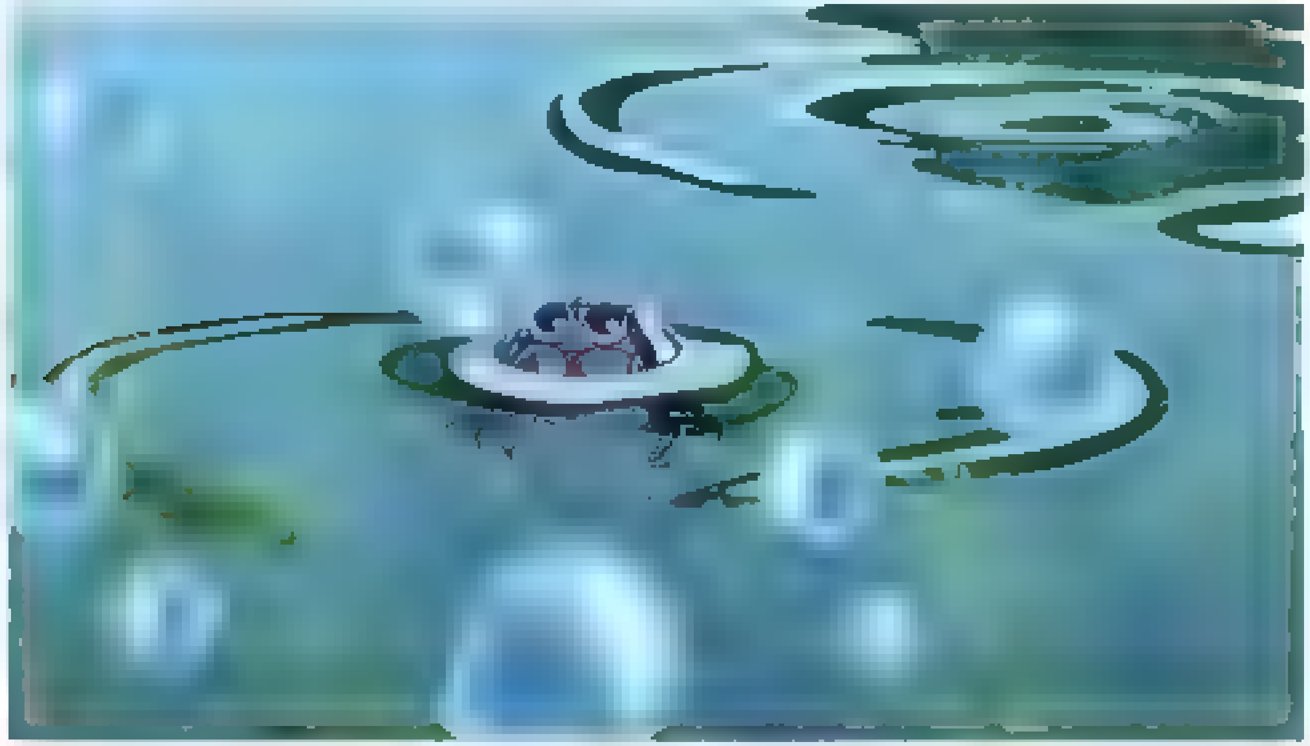




われにかえったアメンボ嬢は
もんもんにびっくり　ひとけりして
あっという間に　行ってしまう

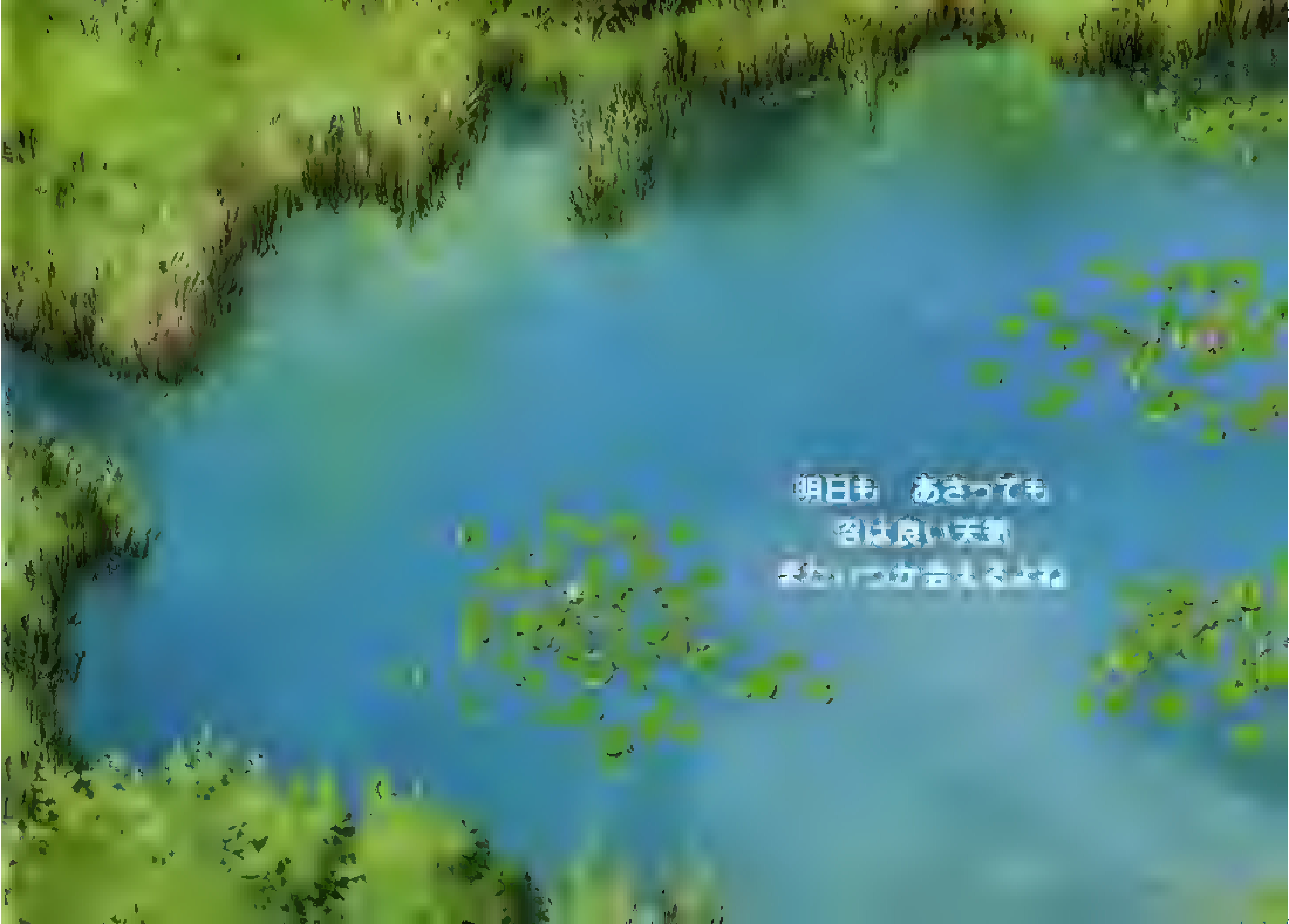




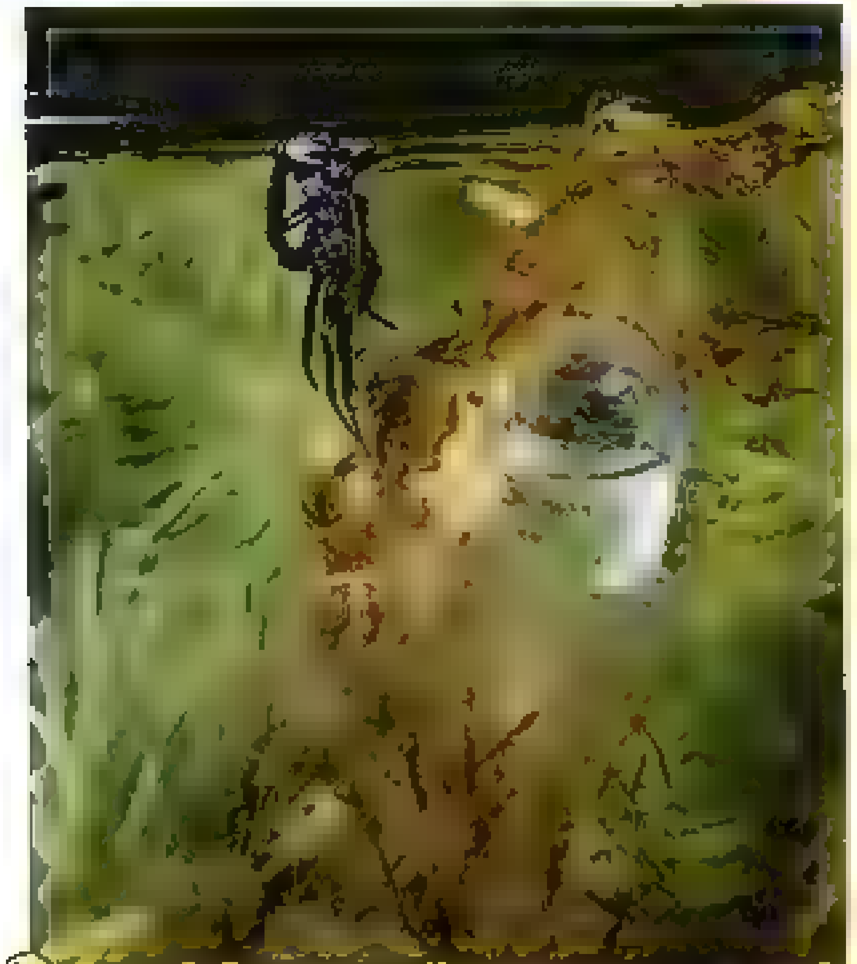


とりのこされたもんもん
雨粒が落ちて来て 水柱をたてはじめる
雨だ・・・

アメンボ嬢は　もんもんがたすけてくれたのを知っていた
水の上と下で　手がむすばれる　夢のようなランデブー
でも水グモとアメンボは　いつまでも一緒にいられない
さようなら　　またね


明日も　あさっても
沼は良い天気

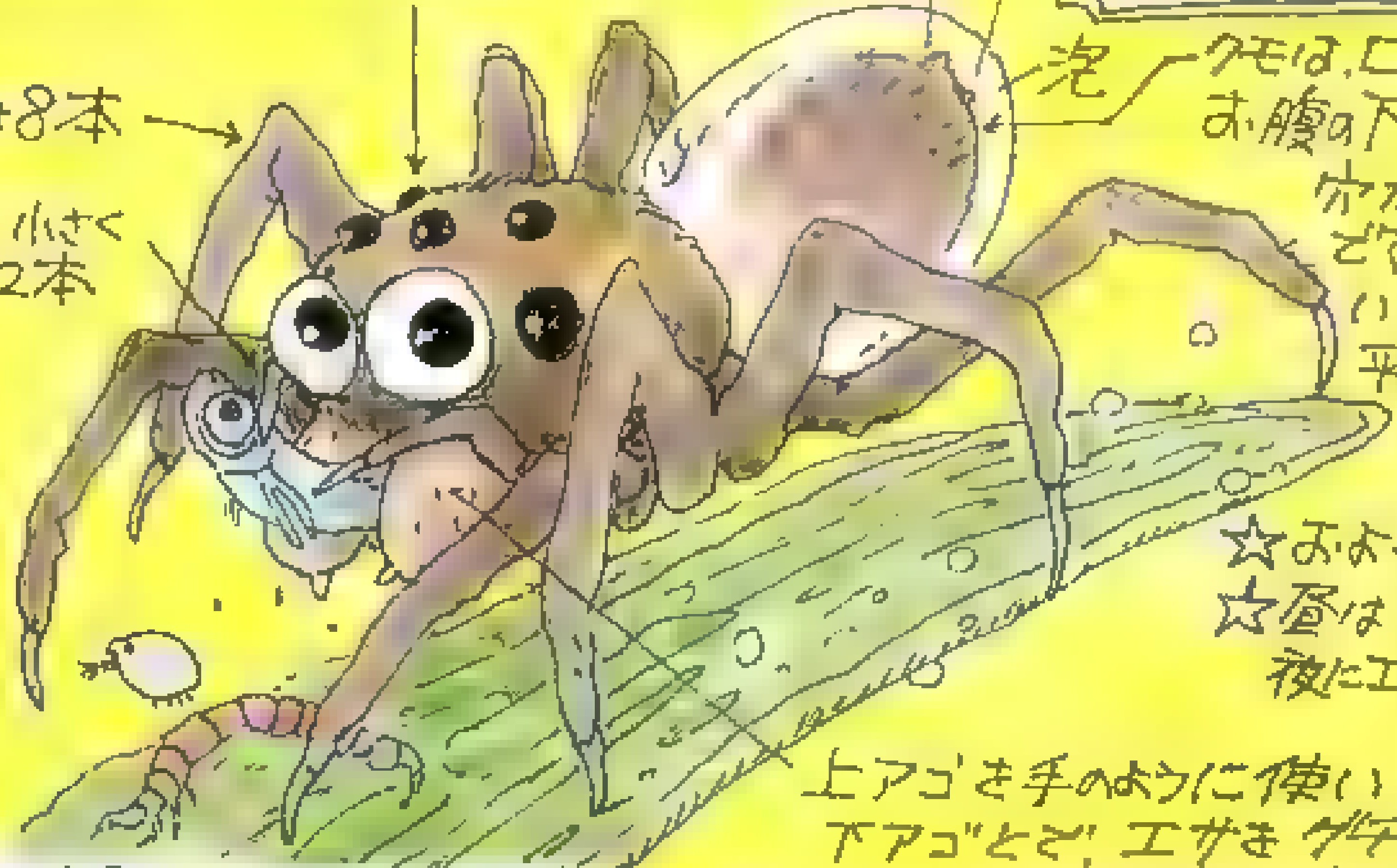
水グモのはなし



お尻に空気の泡をつける水グモと水中の巣。頭からお尻の先まで1cmくらいの小さなクモです。

写真 新海栄

もんもんの身体のひみつ



もんもんはお尻で息をする

クモは口で息をしません お腹の下に空気をすう穴があります。ですから泡をつけていれば水の中でも平気なのです

☆およぐのはヘタ
☆昼はかくれていて、夜にエサトリをする

上アゴを手のように使い 奥にある下アゴとで、エサをグチャグチャにして、つばとまぜてすいます。

エサは自分よりよわいものなんでも

矢野顕子

1955年[illegible]ライ[illegible]NY在住。70年[illegible]JAPANESE GIRL[illegible]現在まで[illegible]25枚[illegible]する[illegible]CM[illegible]映画音楽を手がける[illegible]する

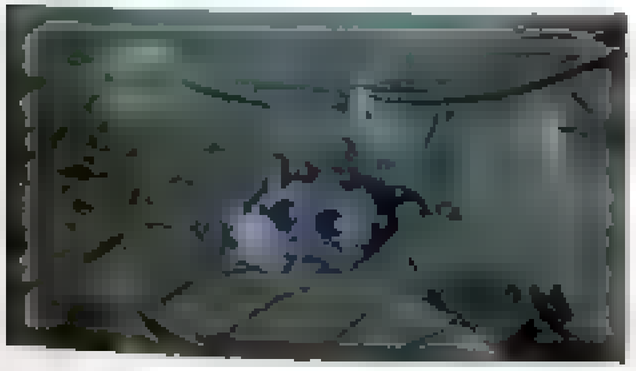
この作品から、言葉で表現することの便利さに改めて気づかされました。

この作品ではアメンボ娘と主人公のもんもん、それからミズグモの音を声で表現しています。最初はアメンボ娘をお願いしますと言われていたので、まさかもんもんやミズグモまでやるなんて思っていませんでした。少し戸惑いましたね。

作業は宮崎監督の指導を受けながら、映像を見て、セリフのない虫たちの出す音を創作していくという感じでした。その時に意識したのは宮崎監督の頭の中にある音のイメージにどれだけ近いものを出せるかということでしたね。でも実際には私が提供した音を聞いて、「あっ、それもいいね」という感じで現場で一緒に作っていたようなところもあります。

普段私は音楽家として、言いたいことを音楽で表現しています。けれど、今回、この仕事をやらせて頂いたことで、実は言葉で表現することがどんなに便利なものか、と改めて感じました。言葉という意思を伝達する手段を断たれた時の自分の無力さを、実感したんです。

ところで、私は初め、映像を見て男の悲壮感、悲しみが込められた物語だなあと感じながら、もんもんは青年だと思っていたんですね。そうしたら監督が、もんもんは中年のおじさんだって言うじゃないですか。アメンボ娘ともんもんのどちらの味方になればいいのか、複雑な気持ちになりました。さらに、映画のラストでアメンボ娘との空中散歩で別れた後、もんもんは、またすぐにアメンボ娘に会えると思っていると説明されてびっくりしました。私がアメンボ娘だったらこれでおしまい。楽しかったわっていう感じなので、ふたりがまた会うなんて思わなかったんです。映像ってこんなにも人によって見方や解釈が違うんだなあと感心しました。そんな風に考えていくと、この作品は実は大人の恋の、深い物語なのかもしれません。でも、美術館でこの映画を観る子供達は何を思い、どんな反応をするのかしら。とても気になります。いつか美術館に忍び込んで、大勢の子供達と一緒に観てみたいですね。(談)



山瀬理桜

[illegible]2000年[illegible]04年[illegible]ヴァイオリン[illegible]演奏活動や指導を行う

ハルダンゲルの音色とともに、心に残る音楽になると嬉しいです。

日本で北欧音楽はあまり知られていません。私は北欧音楽を学ぶ機会を得て、ノルウェーのハルダンゲルという土地で生まれたヴァイオリンに出会いました。そのヴァイオリンは私たちが知っているヴァイオリンと違い、音に厚みと広がりがあり、温かく懐かしさを感じます。ハルダンゲルヴァイオリンに魅せられて、私はこのヴァイオリンで北欧音楽を日本に広めたいと思いました。そうして地道に活動を続けた結果、2004年4月に「ゴールデン・オーロラ」というCDを出すことが出来ました。収録では、ハルダンゲルヴァイオリンを始め、ヴァイオリンなどすべての音を自分で演奏しました。このCDを宮崎監督が気に入って下さって「水グモもんもん」の音楽にと声をかけてくれたのです。絵コンテを描きながらも聞いて下さったそうで、とても光栄です。

[illegible]ルダンゲルヴァイオリンは9本の弦を持ち、うち5本は共鳴弦のため、ひとりで2人分の音を出せる

絵コンテを見た時は、水の中の物語で、水をイメージして作ったアルバム「ゴールデン・オーロラ」との不思議な縁を覚え、とても嬉しく思うのと同時に、私の中で自然と音楽が生まれてくるのを感じました。宮崎監督が映像を見ながら即興的に音楽を作ってほしいとおっしゃったことから、作業は私がラフの映像を見て何曲か作ったものを監督に聞いて頂き、それをもとに監督の中にある音楽イメージに近づけていくという私と監督の掛け合いのような形で行われました。その作業の中で、監督は私が持っているいい部分を自然に引き出して下さったように思います。ザリガニのシーンでハラハラする感じの音楽を準備していた私に、もっと悲しい感じの、もんもんの気持ちの音楽を入れてほしいと言われた時は、単純に映像に合った音楽をつければいいわけじゃないということを学ばせて頂きました。

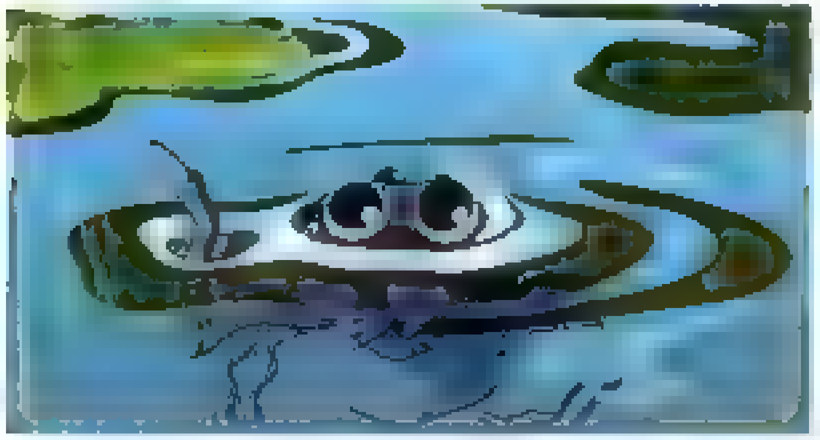
もんもんには宮崎監督の愛情がいっぱい詰まっています。私も音ひとつひとつに愛情を込めて音楽をつけさせて頂きました。ハルダンゲルの音色とともに、この作品の音楽が心に残るものになったら嬉しいです。(談)

田中敦子（演出アニメーター）

**虫のサイズで世界を描く
その感覚をつかむのに時間がかかりました。**

この作品では今までアニメーターとして培ってきたノウハウが見事に役に立ちませんでしたね（笑）。虫のサイズで世界を描くという感覚が私もスタッフもすぐには理解出来なかったんです。いつもの水の描き方で描くと、もんもんの着ぐるみを着た人間のようになってしまう。宮崎さんに「ディテールを大きく描け」と教えていただいて、頭でわかっていても、スタッフ全員これまでの経験で手が自然に人間サイズの波紋や水滴を描いてしまって、困りました。

それに、それぞれのキャラクターの個性の出る動きをどうするか。人間と全然違って、もんもんは体全体を使ってオーバーに動かさないと何をしているのかわからない。口が見えないので、悲しい時とうれしい時といつも同じ顔なんです。それで気持ちを表情にうまく表現するのが大変でした。宮崎さんは、アメンボ娘にフラれたもんもんがミジンコを食べないのは、失恋して落ち込んでいるからだけでなく、ミジンコにも命があることに気づいて食べられなかったんだと心情を説明してくれましたが、そこまで表現できたかどうか。アメンボ娘に関しては、水面の走り方は大塚伸治さんにとても助けていただきました。また、とにかく色っぽくというのが宮崎さんの望みでした。でもラッキョウのような頭にリボンをつけたキャラクターをどうしたらかわいく上品に色っぽく見せられるのか……。原画の山下（明彦）さんが頑張って宮崎さんの期待に応えてくれました。



そうしたスタッフに助けられながら、ドキュメンタリー映画「ミクロコスモス」を観たりして、みんなで作品世界をつかんでいきました。実際に水槽にメダカやナマズを飼って観察したりもしたんです。宮崎さんは、水槽を拡大レンズで覗いて「これだ!」って興奮していましたよ（笑）。水草の葉脈に空気が入っているのまで見えて、まさにもんもんの世界なんです。プランクトンは動画の人たちが面白いものをいっぱい楽しみながら描き込んでくれました。撮影の処理でも数を増やしてくれたりしています。

なんとか完成させることが出来たのは、複雑な作業をこなして下さったスタッフの皆さんのおかげです。ありがとうございました。1度目はお話を観て、2度目はもんもんの水中生活を観て、3度目はたくさんの水中生物を観てと、何度も観て楽しんでもらえたらと思います。（談）

渡邊洋一（美術監督）

**なかなか宮崎さんがイメージする
水中世界をつかめず苦労しました。**

絵コンテを読んだ時は、水中ということで大変だなと思いました。美術ボードを描く時には、水の中の世界は、はっきり見える感じとぼけた感じが混じりあっていて、遠くの方は色が溶け込んでいる気がしたので、その感じを絵にするため、紙の上で色同士がスーッと溶け込んで、かつ描き込みの自由度の高い水彩画がいいと思いました。最初に描いたボードは、物語の舞台が少しにごった水の池ということだったので、水の色をグリーンにしました。水草の色をいったん反射させた感じです。宮崎さんはそれを見て「もっと澄んだ感じだから水はブルー、水草の色はグリーンにしよう」と決めました。色を多彩にしようということになったんです。でもブルーは紙に塗った時いいと思っても、絵の具が乾くと同じ色でも塗りの厚みの違いなどで、思いもしない色になるんです。「水のブルーはきつい色にしないように」と宮崎さんから言われていましたが、うまくいかず苦労しました。しかも水草の多い背景は、どうしても水草のグリーンに引っ張られて全体がグリーンに見えてしまうんです。また、宮崎さんに「幸せな感じに」とか「暗くしすぎないように」とも言われました。水中には、光が当たっているところはすごく綺麗なのに、ちょっと深みに入ると昼間でも真っ

暗で怖いというイメージもあるので、悩みました。上映される土星座は子供達がホッとできる映画を観てもらうために作られた映画館です。その場にも、もんもんのキャラクターにも合うような、リアリティがあって、でも少し漫画っぽい、そんな背景にしたいという気持ちで、絵作りをしました。また、宮崎さんから虫の目になって水中世界を描くという大きな課題も与えられていましたし、方向が決まるまでにずいぶん時間がかかってしまいました。

美術部では、水槽に池の土や水草を入れて観察しました。その水槽から、水草の形態や水草の葉っぱが水の中でねじれながらゆらいだりするのが確認できました。また、光が葉っぱを透かす様子もわかりました。光の透け具合によって絵の雰囲気が大きく変わりますから、光の雰囲気や射し込み方は背景を描く時にかなり意識しましたが、なかなかニュアンスを伝えることができず、スタッフに迷惑をかけたかもしれません。多くの方に助けて頂き、作業を進めることができました。本当に感謝しています。この作品の美術監督をやらせて頂いて、多くのことを学びました。そしてこの作品を見てくれた子供達が喜んでくれることを願っています。（談）

奥井　敦（映像演出）

撮影部の仕事は、最後に入れる映像の隠し味。

この作品の中で描かれる水中はミクロの世界です。人間の目で見た状態の水中ではなく、接写レンズやルーペを通して水中を見た感じの世界。その感じを背景や作画スタッフが描いたものにちょっと処理を加えるというのが今回の撮影部のひとつの大きな仕事でした。接写の世界はピントが合っているところってすごく限られています。接写レンズで水グモを追うと、ピントは水グモには合っているけど、その周りはぼけている。その感じをそのままこの作品で再現しただけではアニメーション映画として成り立ちません。ですから水中シーンに関しては、ピントとボケをいかにコントロールするかが課題になりました。そこで、基本的な画面設計は従来どおりに進めておいて、撮影時に各シーンの内容、ニュアンスに合わせて調整することにしました。基本的には、セルアニメーションの時に行っていたマルチプレーン撮影（背景やセルを実際に距離をおいて配置し、撮影する手法。ピントがあっているもの以外は距離により自然にぼける。通常はすべての素材を密着させて撮影する）をコンピューター上で再現することをベースにしますが、対象となる素材は背景にすべて描き込まれているので、それを分ける作業から始めます。手前に描かれた水草、その奥にあるもの、その他に細かく分けてからセル素材を含めて再配置したうえで、ピントのコントロールをしたんです。水中シーンに関しては、そういった作業をほとんど全カットやりました。カットによってはピントを合わせる位置が微妙で、時間がかかりましたね。それから宮崎さんに「画面全体にフィルターがかかっているような、水中で光が散乱して馴染んでいるような感じが欲しい」と言われたので、そういう処理も加えています。あとは水草に光が当たってキラキラしているとか、水面から光の筋が射して動いているというような処理も行いました。背景に描かれているハイライト部分にちょっと動きをつけて、その部分を少しぼかすと、明るいところが強調されてキラッと光るんです。そうすることで水中世界に奥行きと光の変化を出すことが出来ました。簡単に言うと画面の中のライティングを部分的に強調したという感じですね。その他、水中に浮遊物を足したりもしました。画面により生命感が出ると思ったんです。雨のシーンでは水面に広がる波紋の増殖配置もしました。

撮影部の仕事は、最後に隠し味を入れる「味の素」だと宮崎さんが言っていました（笑）。その通りだと思います。それにしてももんもんの報われない恋の物語にはグッとくるものがありましたね。僕は水辺にはえている植物の影からアメンボ嬢を見ている健気なもんもんが気に入っています。もんもんの気持ちになってミクロの世界を体感してもらえたら嬉しいです。（談）

スタジオジブリ・マンマユート団　提携作品

＜声の出演＞

矢野顕子

＜スタッフ＞

原作・脚本・監督　宮崎　駿
音楽　山瀬理桜
制作　スタジオジブリ
プロデューサー　鈴木敏夫

演出アニメーター　田中敦子
原画　山下明彦　芳尾英明　鈴木麻紀子　米林宏昌
佐藤雅子　二木真希子　大塚伸治

動画チェック　舘野仁美
動画　手島晶子　中込利恵　大村まゆみ　坂野方子
斎藤昌哉　藤井香織　アレキサンドラ・ワエラウフ
大橋　実　笹川周子　石角安沙美　檜垣　恵
室井康雄　三浦智子

西戸スミエ　槇田喜代子　土岐弥生　椎名律子
大谷久美子　富沢恵子　大友康子　藤森まや
矢地久子

山浦由加里　金子由紀江　菅原隆人　中西雅美
中里　舞　小山正清　福井理恵　谷平久美子
岩上由武　塚本　歩　小野寺香奈　石井邦俊
竹上充知子　三谷幡之　伊藤かおり　西河広美
動画協力　アニメトロトロ　中村プロダクション　動画工房
たくらんけ

美術監督　渡邊洋一
背景　田中直哉　春日井直美　伊奈涼子　増山　修
吉田　昇
デジタル特効　糸川敬子

色彩設計　保田道世
デジタルペイント　高柳加奈子　森奈緒美　沼畑富美子　石井裕章
山田和子　古城理恵　高橋広美　熊倉　茜
藤岡陽子

デジタル作画監督　片塰満則
デジタル作画　佐藤美樹　石塚直子　桝内　進　三好紀彦

CGエンジニア　井上雅史

映像演出　奥井　敦
デジタル撮影　薮田順二　高橋わたる　田村　淳

サウンドデザイン　染谷和孝　長谷川有里
アシスタントエンジニア　貞安克久
録音スタジオ　ソニーPCL　東京テレビセンター　デジタルサーカス
音響制作　ソニーPCL
音響制作マネージメント　池島千晶
ポストプロダクション　古城　環
キャスティング　稲城和実

レコーディングエンジニア　大野映彦　杉山オサム
アシスタントエンジニア　嶋本剛樹　板橋聖志
音楽編集　大野直子
演奏　山瀬理桜（ハルダンゲルヴァイオリン、ヴァイオリン）
城　綾乃（ピアノ、キーボード）
音楽収録　ソニー・ミュージックスタジオ
スタジオインパクト下井草
音楽制作マネージメント　長井　孝
音楽制作　スタジオジブリ
津司紀子

編集　松原理恵　瀬山武司

制作担当　渡邊宏行
制作デスク　神村　篤　望月雄一郎
制作進行　伊藤郷平
演出助手　清川良介

現像　IMAGICA
タイミング　平林弘明
フィルム・レコーディング　本間政弘
カラー・マネジメント・システム　松本　渉
ラボ・コーディネート　志村由布子

© 2006 二馬力・MG

発行日：2006年1月1日初刷　2008年9月30日第2刷　発行人：中島清文　発行所：財団法人徳間記念アニメーション文化財団　東京都三鷹市下連雀1-1-83　三鷹の森ジブリ美術館
編集：今西千鶴子　デザイン：原 美恵子・矢島 洋（東宝アド株式会社）　編集担当：筒井亮子・三好 寛　編集協力：安西香月　水グモ資料：小野展嗣（国立科学博物館）
協力：株式会社スタジオジブリ　印刷・製本：図書印刷株式会社　定価 400円（税込）

TMCFA-020 400
4 571101 919318